長野県革新懇ニュース

2018年11月号
発行日11月10日
会　費　2,000円
購読料　3,000円（送料込）
振　替　0510-3-15971

234

発　行　日本と信州の明日をひらく県民懇話会
（長野県革新懇）発行人：山口光昭　編集長：高村裕
〒380-8790　長野市県町593　高校教育会館内
TEL：026-234-1231　FAX：026-234-2219　ﾒｰﾙ：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

1面　桂川雅信さんインタビュー
2面　１面続き、近現代信州の歴史回廊　小平千文さん
3面　沖縄のこころに触れた県知事選　古見公弘さん
　　東栄蔵さんの逝去を悼む　各地の動き・読者の声
4面　随筆『雨よ降れ』「言霊」を返せ　窪島誠一郎さん
　　革新懇・秋の活動交流会と記念講演会
　　漢字パズル

長野県革新懇　検　索

1946年生まれ。神奈川県川崎市職員、北海道教育大学札幌校非常勤講師、滋賀県立水環境科学館（指定管理者）館長などを歴任。現在は中川村議会議員、日本科学者会議長野支部幹事、全国水の相談所主宰。

リニア新幹線事業
地域の安全・安心を最優先に

桂川 雅信 さん

（日本科学者会議長野支部幹事、技術士）

自らの専門性を地域で生かしたい

Q　リニア問題にどのような経緯で関わるようになったのでしょうか？

大学時代に土木工学の専門的な教育を受けて、社会に出てからは、始めは川崎市の下水道局で主に設計業務を13年以上やっていました。ただ、下水道整備の傍らで、それで本当に川がきれいになるのかという疑問が強くなり、最終的に下水道の世界から飛び出して、人と社会がかかわる接点としての水環境の世界を極めていこうと思うようになりました。人生の後半は河川湖沼の水質全体とそれに関わる人々の生活や環境などについて住民の人たちと一緒になって改善していく方策を考えていこう思い、90年代から2000年代初頭は環境基本計画を策定する仕事をコンサルタントとしてやっていました。

長野県に移住するにあたって、ここは山紫水明の地なので、私の知見を活かせるところはないだろうと思っていました。ゆっくり農業でもやって、半日は今まで整理していた文献をまとめようと思っていたんです。ところが、来てみると、私のところに色々な情報が入ってくるわけです。安曇野の産業廃棄物の問題とか、ソーラーパネルの問題とか、そうこうしているうちにリニア問題が出てきて、関わるようになったわけです。地元には専門家の方があまりいらっしゃらないので、ＪＲ東海の言いなりに自治体も流されてしまう。これはまずいなと思って、かつて私が仕事としてやっていた土木工学の世界をもう一回ほじくりだして、皆さんと取り組んでいるわけです。

見切り発車の残土処分問題

Q　リニアに対する賛否はあるものの、大きな関心は残土の処分問題だと思います、この点についてはいかがですか？

これだけの大規模な土木事業をやる時には環境影響評価を行って、準備書面で残土の処分策を示すのが本来のやり方です。しかし、今回の場合は各県の分をすべて国に提出する形にしているので、準備書面では県ごとの残土処分の細かいところについて一切触れていないんです。国が認可した後、残土の処分地の設計が出来上がったら、県の環境影響評価の技術委員会に意見を求めるという感じです。だから、認可が終わって、着工するという話になって、トンネル残土の処分方法を示すという後付のやり方なんです。残土の処分地をどうするかということを全く決めずに事業が始まっているということが一番大きな問題です。

特に長野県では９５０万㎥の残土が出るんですが、それに膨大な残土をどこにどうって処分するのかということはほとんど決まっていません。国は、候補地の選定を各県に投げてしまい、県が各市町村に候補地を探すよう求めています。ＪＲが最終的に狙っているのは工事現場に近いところ、しかも大量に処分できるところです。それで一番目をつけているのが谷筋なんです。それはＪＲにとって都合がいいだけであって、人々の生活にとっては大変な影響があるところです。

もう一つは土壌汚染問題です。ＪＲが行う調査は、掘削した残土のスポット調査なんです。例えば一日に一度残土サンプルを取り、そこで何検出されなければ大丈夫ということになるわけです。たとえば本来、有害物質が入っていることが危惧される時には、この地下水を採取して、そのものをずっと追跡する必要があります。有害物質があれば地下水の中に必ず流出するので、たとえばメダカのような生物を水槽に入れて、たえずそれてくる地下水を流して監視するという方法もあります。今のやり方だと有害物質が出てきた時、突然魚が浮いたりしてわかるのですが、その時はもう被害が蔓延しているわけです。だから、手遅れにならないようにするには、生物学的毒性試験をやるのが一番早道だと言っていますが、ＪＲも県もやる気はないですね。これは非常にまずい事態です。県が監督官庁としての力をきちんと発揮せずに、環境汚染がすすんでいくということが危惧されます。

各地で残土の処分計画がとん挫

Q　処分地については、今どのような状況でしょうか？

残土処分の候補地はわかっているだけで7箇所以上ですが、実はこの中で正式に決まったというところはまだないんです。県の環境影響評価の技術委員会を通過して、県が了解したことになっているところは、豊丘村の本山と大鹿村の旧荒川荘前です。２箇所とも谷埋め盛土と河川敷です。しかし、まだ住民がダメだと言っているので、結局どこも決まっていない。本山については１３０万㎥ですけども、森林組合の総会自体が何十年も開かれていないことが問題になっていて、今も収拾がつかない状態で同意書どころではありません。

処分地について最初は、豊丘村の小園地区というところが候補に上がっていたんです。ＪＲはそこに50万㎥入れようとしていました。そこも36災害（１９６１年に伊那谷を襲った大災害）で被害を受けたところですが、私はそこに4回学習会に呼ばれて行っています。私は直下に集落があり絶対ダメだという話をして、地元の人たちを励ましながらずっと学習会を続けてきました。その後に署名運動が始まって、あっという間に署名が地域の70％以上集まったんです。リニアの賛否は関係ないんです。危険なところに土砂を埋められたら困る、その一点なんです。署名簿の冒頭に「私たちはリニアの開通に期待を寄せています」と書き出し、しかし、私たちは上流の谷筋に残土が入れられるのは認められないと書いています。実は村長もその地域に住んでいるんですが、議会で「あんなのはリニア反対派が後付けでやっているだけだ」と答弁したところ、住民から猛反発をくって、結局議会で謝り、村としての候補地の推薦は取り下げました。ＪＲも地権者の了解が得られないと言って、そこは取り下げました。実はこの出来事が、ＪＲがリニアの当初計画を取り下げた一番最初の出来事なんです。

一番典型的なのは松川町ですが、ＪＲは松川町に全部で３００万㎥、場合によっては５００～６００万㎥を入れようとしていたんです。ところが、残土処分地の下流域に福与という地区があるんですが、そこが36災害の時に大変な被害を受けているんです。実は、残土処分予定地の谷筋から当時、大量の土砂が流出して福与地区が押し流され、壊滅したんです。当時を知っている人が健在で、地区の幹部になっているので、こんなところに土砂を入れるな

【２面に続く】